

[担当教員]

小幡剛也（客員教授 / 竹中工務店） 本田孝子（日建設計） 畑友洋（畑友洋建築設計事務所） 槻橋修（教授） 浅井保（助教）

[Teaching Assistant]

加藤千悠（A71） 徳栢謙輔（A71） 舟木健太郎（A71）

■課題概要

敷地は阪急六甲駅北側プラットフォーム沿いの区画。ここに建築教育施設、建築に関連する諸々の情報の発信拠点、そして駅機能の複合施設を計画する。阪急六甲駅の平日の乗降客数は約 30,000 人 / 日。一方、教育施設の主たる利用対象者は神戸大学建築学科 / 建築学専攻の関係者は約 500 人。さらに情報の受信者は不特定多数、無数の市井の人々である。ここを通過・滞留・滞在・参加（遠隔含）そして交錯する人々の間の創造的コミュニケーションを促し、これらの多様なアクティビティを可視化する場所とする。このようなイメージを顕在化させる、唯一無二の、ここにしかない磁場を創造することが本課題の趣旨である。

■附帯条件

駅機能は敷地内のいずれかに再構成する。既存バス・タクシー乗降機能は敷地外の隣接地に移設するものとし、計画敷地内には不要。教育施設は建築学科に所属する学部生・大学院生・社会人・研究者・教員を主たる利用者とする。情報受信者は建築・関連諸分野のインフォメーションや展覧会・セミナー（ウェビナー）などに集う人々である。それぞれの機能が輻輳する形態とする。建蔽率・階数は規定しないが、複数階積層が前提（面積要件を参照）。周辺環境に配慮したものとし、ランドスケープデザインも建築と同様の地平で思考すること。建築延面積は 8,000 m² 程度とする（敷地（線路敷除く）は約 9,600 m²）。

■計画要件

1. 駅施設（計 1,000 m²）

改札口、駅長室、架線上施設、階段等、ショップ、WC 他

2. 教育施設

スタジオ 400 m² ×2、デジタルファクトリー 200 m²、講義室 80 m² ×4、150 m² ×2、300 m² ×1、研究室 25 m² ×30、会議室 30 m² ×3、50 m² ×2、100 m² ×1、資料室 250 m²、レストルーム、シャワー、ランドリー 他

3. 情報発信施設

ホール 600 人収容・ステージ、ホワイエ、レセプション、ライブラリー、ワークショップルーム、建築模型展示室、デジタルアーカイブ 他
＋コミュニケーション施設（自由設定）
カフェテリア、レストラン、ショップ、アート、フォリー、各機能を連鎖するオープンエア空間等



課題敷地

FLAT FORM 一吹き抜けが繋ぐ複合施設の提案一

山崎稜太

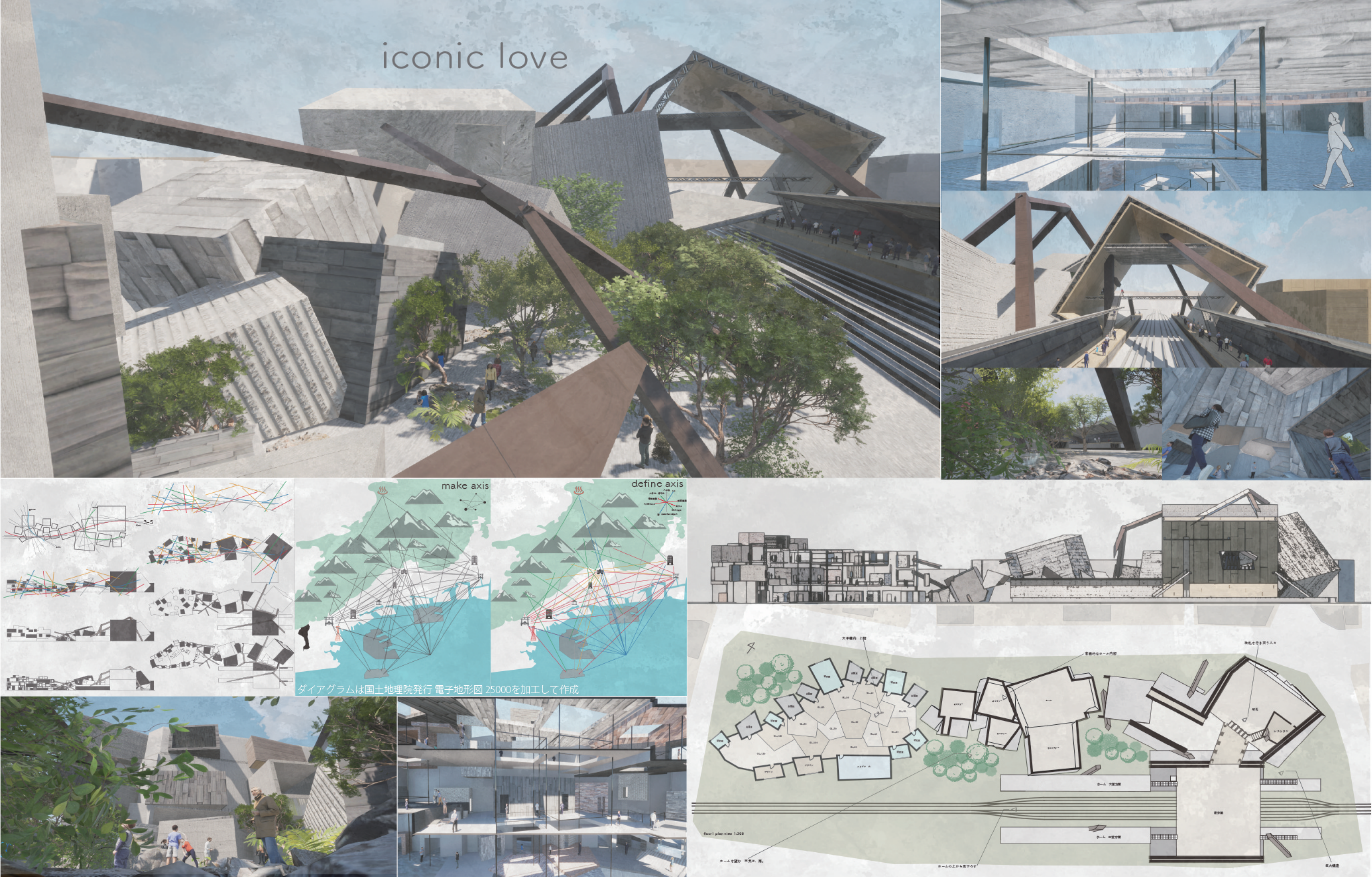
現在の大学では学生たちの活動拠点が大学以外の場に離散している傾向にあるように感じる。また駅構内でも各々のテナントが個々に活動を行い全体としての結束が弱く見える。そこでそれぞれが抱える乖離性をフラットを元に解決し、街に馴染むような新たな施設を目指す。



iconic love

村中希光

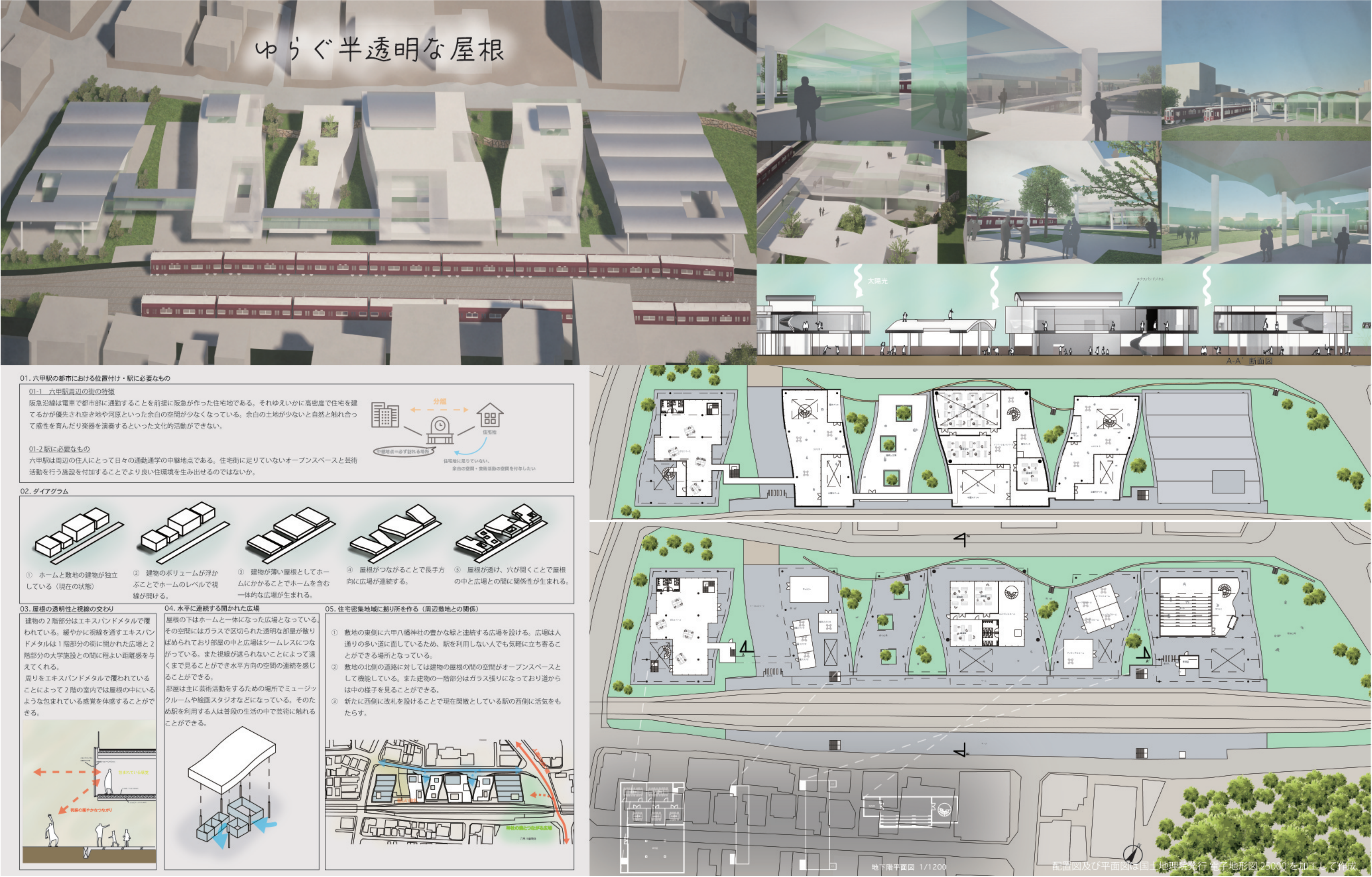
境目を作らない、というテーマのもと六甲駅の新しい形を提案した。学生及び地域に暮らす人々を連続的に、そして有機的に混ぜ合わせることで、新しい流れを形成する。形に沿って対流し、 交点によって掻き回された人々の渦はやがて外へと広がっていく。



ゆらぐ半透明な屋根

平山敦

大学機能を浮かべそれが屋根のようにホーム上にかかっていくことでホームから連続的につながる空間が生まれる。そこには音楽スタジオやアートスタジオなどがあり地域住民は普段の生活の中で芸術と触れ合うことができる。



街を発酵す

吉川日々輝

大規模建築では平面的なスケールが大きく、人の活動や流れも自然と2次元的に行われ、外部からその様子は見えない。本計画では敷地の持つ高低差を利用し、均質的なユニットを立体的に配置する。あらゆる人の3次元での流動は公共建築にとって過去にない偶発的なアクションを生む。



交錯し交流す

神崎真弘

あらゆる年齢層の人々が暮らす六甲という街の駅。線路によって無意識に制限された人々の動きや視線を、ルーバーを用いて交錯させ、自然な交流を促す、まちづくりや生活を豊かにする拠点。ルーバーが切り取る景色はこの街を象徴し、見るものに活力や和みを与える。

